

小学校国語科の授業実践に必要なコンピテンシーの育成に関する実践的研究

◎中村 和弘(東京学芸大学国語科教育学分野) ○大塚健太郎(東京学芸大学附属小金井小学校)
湯浅 佳子(東京学芸大学日本語学・日本文学分野) 佐藤 正光(東京学芸大学中国古典学分野)
大井田義彰(東京学芸大学日本語学・日本文学分野) 千田 洋幸(東京学芸大学国語科教育学分野)
白勢 彩子(東京学芸大学日本語学・日本文学分野) 廣川加代子(東京学芸大学国語科教育学分野)
井上 陽童(東京学芸大学附属世田谷小学校) 細川 太輔(東京学芸大学附属小金井小学校)
古谷 理恵(足立区立千住本町小学校) 渡邊 裕(東京学芸大学附属世田谷中学校)
橋本 和顕(東京学芸大学附属世田谷中学校) 半田 和也(東京学芸大学附属世田谷中学校)
堀内 泰(東京学芸大学附属竹早中学校) 森 顕子(東京学芸大学附属竹早中学校)
菊池 圭子(東京学芸大学附属竹早中学校) (各所属は25年度末現在のもの)
代表者連絡先 nakamura@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 小学校国語科 教科に関する科目 国語科研究 テキストの開発

1. はじめに

現行の学習指導要領においては、小学校国語科の授業時間数は、以前の 1377 時間から 1461 時間とおおよそ 100 時間の増加が図られている。特に低学年においては、総授業時数 910 時間に対して国語科の授業時数は 315 時間(第2学年)とほぼ 1/3 を占めており、「国語科の授業が一人前にできる」ということは、本学における小学校教員養成の質保証という点からも、重要な指標であると考えられる。

加えて、現行の学習指導要領は、その改定の基本方針として「言語活動の充実」を打ち出しており、教育課程全体を言語や言語を使った諸活動という観点からとらえ、また、中学校の教育内容との連携を考慮しながら授業をつくっていくことが求められている。教員自身の言語スキルの向上が重要であることはいうまでもないが、さらにこうした現況に対応できる諸能力も、小学校国語科に関係する大学の授業科目の中で育成していくことが必要とされている。

本学国語科教室では、既に 22 年度、23 年度のトップマネジメント経費による特別開発研究として「小学校国語科教育における国語以外を専門とする学生へのコアカリキュラムの開発」に取り組み、その具体的な成果物として、プロジェクト報告書を兼ねた「国語科研究」テキストを作成した。

本研究では、さらに多くの附属小・中学校の教員の協力を得ながら、大学での「国語科研究」や「初等国語科教育法」などの講義の内容や方法を多角的に検討し、現在の小学校教育の現場を担うことのできる実効性を伴った教員養成のあり方を具体的に提起したい。

2. 本プロジェクトの目的

現在、本学における小学校国語科に関する科目は、教職に関する科目である「初等国語科教育法」(2単位)と教科に関する科目である「国語科研究」(2単位)である。学生は、この2科目の講義および附属校と公立校における2回の教育実習を経て、小学校国語の授業を「一人前にできる」ところまで、養成されることが期待されている。

本プロジェクトでは、現行の学習指導要領のもとで小学校国語科の授業を行うにあたって必要なコンピテンシー(職能)を明らかにし、その育成を図る上記の大学の関連講義の内容と方法の改善を図ることをねらいとしている。具体的には、

- ①. 小学校国語科の授業を実践するにあたって必要な教科内容に関する知識と教育方法に関する知識を再検討する
- ②. 教員として効果的に教育活動を遂行するための話す・聞く・書く・読むといった言語スキルを明らかにする
- ③. それらのコンピテンシーを大学での養成段階で確実に身につけるために、本学の「国語科研究」を始めとした関連科目の内容と方法についての改善点を明らかにする

の3点について、大学と附属学校とが協働して取り組むものである。本研究では、多くの附属小・中学校の教員の協力を得ながら、主に教科に関する科目である「国語科研究」の講義の内容や方法を多角的に検討し、その共通テキストの作成を通して、小学校国語科の教育内容と教育方法とを架橋させて授業づくりを行うことのできる教員養成を目指すことをねらいとしている。

3. 本プロジェクトの内容

(1) 課題点の整理

他の教科・領域と同様、国語科においても、教科専門科目と教職専門科目との架橋が求められている。教職専門科目、例えば「初等国語科教育法」では、学生達は学習指導要領の理解や様々な指導方法について学び、実際に学習指導案を書いて模擬授業を行うなどの学習に取り組む。一方で、教科専門科目すなわち教科に関する科目である「国語科研究」では、文法や文学などの国語科の教科内容に関する基礎的な知識を学んでいる。この知識が、教材研究などの視点や方法となり、その教材研究と普段の児童理解とが重なり合って指導方法が編み出され、学習指導案の作成、授業実践へとつながっていく。教科専門科目での学びは教職専門科目での学びと相互に結びつきながら、実際の授業実践に資するものとなる。逆に言えば、教科に関する科目である「国語科研究」の内容は、日本語学研究や文学研究の〈概論〉ではなく、小学校国語科授業実践のための教科内容に関する〈基礎論〉であることが求められる。そのため、この〈基礎論〉は、〈概論〉とは全く異なったアプローチで編成される必要がある。

こうした教科専門科目の取り組みの工夫は、すでに様々な教科・領域で取り組まれているが〈1〉、本研究の特徴は、小学校という校種の教員養成を対象としていることである。小学校教員の場合、中学・高校における国語科教員養成のための教科専門科目とは、また別種の内容編成が必要となる。

全科を担当する小学校教員の場合、教員免許状取得のために、教科専門科目は国語、社会、算数などから「1以上の科目、合計8単位以上修得」となっており、東京学芸大学の場合、国語科の教科に関する科目（「国語科研究」）は、前述の通り2単位（90分×15回）となる。この時間の枠内で、小学校国語科の内容に関わるすべての基礎知識を扱わなければならない。

また、国語科の中での教科専門科目と教職専門科目との架橋だけでなく、小学校は原則として全科担当であることから、教科と教科とを架橋させていく観点やその手法についても学ぶ必要が出てくる。「言語活動の充実」が現行の学習指導要領改訂の基本方針と出され、また、多くの小学校教育現場でその取り組みが行われていることから、教科と教科の間ではたらく言語力、いわゆる「通教科言語力」についても、小学校国語科の教員養成のプロセスで扱うことが求められてくる。

このように、教科専門科目の内容は、「国語科ならではの」という観点に加えて「小学校ならではの」という観点が重要であり、その双方の観点から構築していかなければならない。小学校国語科の授業実践を行うために必要な教科内容に関わる知識が、日本語学や文学研究の〈概論〉ではなく、独自の体系をもった〈基礎論〉であることの必要性もここにある。

(2) 先行する取り組みと本プロジェクトの取り組み

前述のように、本学の国語科教室では、既に平成 22・23 年度の 2 年間にわたり、「小学校国語科教育における国語以外を専門とする学生へのコアカリキュラムの開発」（代表：佐藤正光）の取り組み、教科に関する科目の内容について検討を重ねてきた。この研究の成果は、『国語科研究テキスト』という暫定的なテキストとしてまとめられた。以下は、その暫定版テキストの主な目次である。

- | | |
|----------------------|--------------|
| 1. ことばの世界 | |
| 2. 日本語学にふれよう | |
| 3. 日本語学と国語教育 | (以上、日本語学関連) |
| 4. 漢字の世界 | |
| 5. 日本語における漢字の意義と役割 | |
| 6. 『論語』と日本の漢詩 | (以上、中国古典学関連) |
| 7. 古典文学史、和歌・紀行文 | |
| 8. 軍記『平家物語』巻十一「那須与一」 | |
| 9. 御伽草子「浦島太郎」 | (以上、古典文学関連) |
| 10. 近代文学の世界 | |
| 11. 近代文学を読む | |
| 12. 近代文学と教育 | (以上、近代文学関連) |
| 13. 文章を分析する | (その他) |

この暫定版『国語科研究テキスト』は、主に大学の教科専門科目の担当教員が、小学校国語教科書などを参考に、自身の専門領域についてまとめ直すという方法で内容が構成された。それらの内容に、例えば、教科教育の担当者が授業につながる「コラム」を付したり、また附属小学校の教員から「提言」というかたちでアドバイスを寄せてもらったりと様々な工夫を施したが、上述のような「実際の授業実践に資するもの」という点では、いくつかの課題が残された。また、「概論」の色合いが強く、「小学校国語科の内容基礎論」の構築のためには、さらなる検討の積み重ねが必要であった。

そこで、24 年度から始まった本プロジェクトでは、先に作成した暫定版テキストをもとに、

- ①. 附属小学校および中学校教員の参加により、教育現場での実際に国語の授業実践に資するという観点から内容を再構成すること
- ②. 暫定版テキストを使って「国語科研究」の講義を行うことを通して、実際の学生の反応などを見ながら、その内容について検討を加えること
- ③. これらの取り組みを通して、本学の「国語科研究」における共通テキストを出版し、多くの学生がそれを使って講義を受けられるようにすること

の 3 点について 2 年間をかけてその取り組みを展開した。特に①の作業については、前回プロジェクト研究の反省を生かし、日本語学・中国古典学・古典文学・近代文学の 4 分野それぞれにつき、教科専門科目の担当教員と教科教育の担当教員、附属学校教員が 3 から 5 名のチームを組み、その内容が教育実践に資するものとなるよう十分に留意し、検討を重ねた。

4. 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

2 年間にわたる本プロジェクト研究の成果は、国語科コアカリキュラム研究プロジェクト編『国語の授

業の基礎・基本—小学校国語科内容論—』（東京学芸大学出版会、2014年3月）としてまとめられた。本書の目次は、以下のようである。

第一章	1 ことばの世界
	2 日本語学にふれよう
	3 日本語学と話すこと・聞くこと
	4 日本語学と読むこと・書くこと
第二章	1 漢字の世界
	2 日本語における漢字の意義と役割
	3 『論語』と日本の漢詩
第三章	1 神話・昔話「いなばのしろうさぎ」
	2 物語『竹取物語』
	3 随筆『枕草子』
	4 和歌「百人一首」
	5 俳文『おくのほそ道』
第四章	1 詩の読み方と教え方
	2 小説・物語の読み方と教え方
	3 授業にあたって
	—芥川龍之介『杜子春』を教材として—
付 録	日本文学史概説



(2) 今後の課題

最後に、本研究の今後の課題とその展望についてまとめておく。

まず、研究の成果としてまとめたテキストの実効性に関する検証作業である。実際に小学校で国語科の授業を行うにあたって「知っておくべき事柄」を、内容としてどの程度カバーできているのかについて検証する必要がある。合わせて、これらの内容がより効果的に学習されるよう、国語科研究の講義方法そのものについても、大学における授業研究として取り組む必要を感じている。

また、本研究は、自分たちの作成した暫定版テキストを乗り越えるかたちで検討を加え、小学校国語科の内容基礎論の構築を目指した。そのため、他大学における先進的な取り組み<2>について、十分に参照することができなかった。研究成果の一部は学会において発表しているが<3>、さらにアウトリーチする活動を展開しながら、教員養成大学・学部間での情報交換を進めたい。

<注>

<1> 角屋重樹、他「理科教員養成のコア・カリキュラムのあり方に関する一考察」『日本教科教育学会誌』第35巻第2号、2012年9月、など

<2> 西園芳信・増井三夫編『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』（風間書房、2009年）や鳴門教育大学による『教科内容学に基づく小学校教科専門科目テキスト』（2014年）など

<3> 中村和弘「小学校国語科教員養成に関するコア・カリキュラムの開発研究」『日本教科教育学会全国大会論文集』2013年、pp.236-237